

# 新撰万葉集と菅原道真

——上巻における和歌と漢詩の或る場合——

山 崎 健 司

## 一、問題の所在

新撰万葉集（以下、本集と呼称）上巻の序文に、「寛平五載（八九三）秋九月廿五日」という記載がある。これが本集の成立時期を示すものと見なし、撰者には菅原道真を推すのが古来の通説である。

この年は、宇多朝における道真の全盛時代に属し、彼の建議によって遣唐使が廃止された前年にあたる。このような状況に加えて、本集（現行本では和歌一首ごとと漢詩を附す）の形態が和漢兼作の文人の営みにふさわしいことから、撰者として道真が擬せられてきたわけである。また、すでに『拾遺集』の時代には、「菅家万葉集」の呼称も行われていたことが、その詞書によって知られる。

ところが、外部の状況から見るとは違って、内部にはさまざまな矛盾を抱えている。本集の和歌を採集資料別に区分すると、「寛平御時后宮歌合」の歌・「是貞親王家歌合」の歌・出典未詳の歌・上の二つの歌合の現行本文には見られないが、他の文献に見られる非歌合歌の四つになる。通説では、和歌一首ごとに附されている漢詩の様相から見、上巻はすべて同時の成立と考えられてきた。し

かし、和歌の配列に注意しながら上巻を読み進めていくと、「寛平御時后宮歌合」の歌の範囲では、ところどころ途絶えてはいるものの、隣接する歌同志が対を成すように次々と繋げられていく連鎖式配列法で統一されていたことが確認される。一方、一定の方針があらって入集されなかった歌合歌の存在も知られる。対して、現行の本集に入集された、出典未詳歌を含む非歌合歌は、この方針に矛盾し、しばしば歌合歌の連鎖を壊している。これによって、寛平五年成立とされる上巻でさえ、その後さらに数次にわたって、別個の編集態度によって形成されたと考えることがができる。——およそ以上の手続きを経て、筆者はさきに「寛平御時后宮歌合」の歌のみから成る、上巻「第一次編集本」の復原を試みた（『新撰万葉集の形成』万葉117号、昭59）。これによれば、上巻の成立を単一の次元で捉えることには無理がある。

漢詩においても同様である。形成の初期に執筆されたと推測される上巻の序文には、「先生非菅賞倭歌之佳麗、兼亦綴一絶詩一挿數首之左」という記載がある。

そこで問題になるのが、上巻の漢詩作者を道真とする説である。

この通説は、近世の林羅山（林鷲峯『本朝一人一首』）が否定、のち金子彦二郎（『新撰万葉集の詩に關する新考察』国語2巻3号、昭12および『増補平安時代文学と白氏文集—道真の文学研究篇第二冊—』昭53）・木越隆（『新撰万葉集上巻の漢詩の作者について』国語4巻4号、昭31）によって実証的な否定説が行われた。印象批評的な羅山の説は別として、金子説・木越説は、上巻の同時の成立を前提とし、道真詩における用語の出現頻度を尺度としている。一方、序文の内容に従って、一部に道真の作が含まれているとする説もある（西下経一執筆『日本文学大辞典』昭8・川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究』昭34・高野平『新撰万葉集に關する基礎的研究』昭45・小島憲之『万葉集の編纂に關する一解釈』万葉集研究第一集、昭47・泉紀子『『新撰万葉集』成立についての試論』女子太文学34号、昭58など）。

本稿の見るところ、金子説・木越説は、全面的否定に傾く点に疑問が残る。

たしかに、二つの論文が論証した例は、道真詩となし得ないものと言える。だが、それらは本集上巻の詩のすべてではない。金子自身が「聊か道真の作らしく思はれないでもない」と述べ、道真詩と見なしても矛盾をきたさない例をいくつか挙げている点に注目する必要がある。また、道真の用語の出現頻度については、数次の形成過程があったことを考慮すれば、初期からあった道真作の一首の詩に対して、後人が模倣して何首も作った可能性も十分に考えられるので、上巻漢詩作者の語彙力の不足にはただちに結びつかない。

したがって、道真否定説と一部道真説とは、論証の過程では相補うものであるとさえ言い得るように思われる。

古く形成の初期からあった詩の中に道真のものがあろうことは、右から知られるものの、どの詩がそれであるかを検出することは、なかなか難しい。

この場合、本集における二つの伝本系統、原撰本系と流布本系の本文の問題と絡んで、次の例が上巻恋Ⅱ（番号は和歌に附した通し番号<sup>①</sup>以下同様<sup>①</sup>）に存在することは、看過できない。

(イ) 思簡屋者如此店名草咩都夜許曾流不絶流礼（原撰本系本文。流布本系<sup>②</sup>板本を除く<sup>③</sup>異本表記）

(ロ) 思簡屋者如此店名草咩都夜曾佐独瘦身者（流布本系<sup>②</sup>板本を含む<sup>③</sup>本文）

(ハ) 寡婦独居欲<sup>④</sup>数年<sup>⑤</sup> 寡婦独居して数年ならむとす

容顔枯槁敗<sup>⑥</sup>心田<sup>⑦</sup> 容顔枯槁して心田を敗る

日中怨恨猶<sup>⑧</sup>忍<sup>⑨</sup> 日中の怨恨は猶し忍ぶべし

夜半潜然<sup>⑩</sup>涙作<sup>⑪</sup>泉<sup>⑫</sup> 夜半に潜然として涙泉と作る

(ニ) おもひつゝひるはかくてもなくさめつよこそなみたつきすなかるれ（十卷本歌合本文）

(イ) (ロ)はⅡの和歌、(ロ)はそれに対する漢詩である。原撰本系では(イ)と(ロ)、板本では(ロ)と(イ)、そして板本を除く流布本系写本では(ロ)と(イ)の本文に(イ)の異本表記が加わる形態をとる。(ニ)は撰集資料「寛平御時后宮歌合」の現存最古の本文。(ニ)は(イ)と密接な関係を持つている。

一つの漢詩に対し、二つの和歌があることをどのように考えたらよいのか。これは形成の経過と関係があり、どちらかの和歌が古態を遺しているのと見るべきではないか。そこで本稿では、右の二つの和歌と漢詩とを読むことによって、上巻の形成において道真がどの程度関与したか、その可能性の糸口を探ることにしたい。

## 二二二の和歌本文

本集上巻において、Ⅲの(イ)と(ロ)のように原撰本系と流布本系の本文が対立する例は、他ではどのようになっているのであろうか。原撰本系に独自の異文を持つ場合に注目してみよう。ただし、「而已」<sup>（み）</sup>と「耳」<sup>（みみ）</sup>など表記上の差違や明らかな誤写誤読と見られる例は、ここで特に取り上げることほししない。

このようにして網にかかった例を観察すると、異文発生の理由がいくつか考えられる。

まず、真名で表記された後の転写過程での、字形の類似による誤写と考えられるもの。27における「老手」<sup>（らうて）</sup>（原撰本系）と「老牟」<sup>（らうま）</sup>（流布本系）のほか、34・95・108などがこれに相当する。

しかし、それだけでは処理しきれないものが数多くある。そこで想起すべきは、同時代の日本紀寛宴和歌のような一字一音式の真名表記と較べると、現行の本集和歌の真名表記は漢字仮名交りの傾向にあり、当時、両者に明確な区別が存在した、ということである（山田俊雄「和歌の真名表記についての試論」山梨大学学芸学部研究報告<sup>5</sup>、昭29）。

これによって、歌合等の撰集資料の表記が、最低限、異文を生じた部分では——むろん全面的であってもかまわないが——、一字一音式の表記であったと考えたらどうか。すると、本集和歌の表記もまた、形成の初期においては資料の表記形態を温存するなり、ところどころに正訓字を宛てるなりした形で存在した可能性が考えられる。「而已」<sup>（み）</sup>と「耳」<sup>（みみ）</sup>など、両系統の本文間にしばしば見られる表記上の差違は、こう考えることによって説明がつく。26は、資料に

「ひと」とあったものが、表記者の態度の相違から正訓字「ひと」と借訓仮名「人」とに分岐したと思われ、「摘鶴」と「摘久留」となっている7や76・96など、一方の表記者が資料を誤読した場合もある。また、正訓字を用いた場合と比較すると、表記によって意味が固定されないで、編者ないし表記者の見解によって若干の修正を加えたことも考えられる。20 21 34 56 62 63 85 97 103などはこれに属すると考えられ、7も同様であるかもしれない。また、19 44 45 70 72 79 85 86 112など、「者」と「之」といった附属語の範囲での異同についても、この考え方で処理ができる。以上がⅢ以外の、原撰本系に独自異文を持つ例のすべてである。

ふたたびⅢに戻ろう。今述べた「若干の修正」と考えられるものは、誤用を正すか、同じ内容で改良するかのいずれかに分類される。ところがⅢは、ただ一つ、二つの句にわたって異文を生じ、(イ)は夜になると涙がとめどなく流れてしまうこと、(ロ)は独り寝の身にとって夜が侘びしいことを言い、どちらも誤用の部分を持たないばかりか、同じ内容で改良したものでもない。原撰本系に独自異文を持つ例としては、きわめて特殊だと言える。

そこで、撰集資料まで遡って歌合の本文(=)を見ると、(=)に対しては(イ)も(ロ)もともに異伝を生じているものの、原撰本系(イ)の本文の方がより歌合(=)の本文に近い。

本集と十巻本所収の歌合の本文とを比較した場合、異伝を持つ小異歌については、その異同の程度によって、附属語または僅かな内容の相違にとどまるA類と、歌の一部がまったく内容を異にする別の語になっているB類とに分類すべきこと、うちA類は本集の歌形が古態を遺している可能性が高い一方、B類は本集に入集の後に何

らかの理由で変更された結果だと見られること等については、前掲拙稿の中で述べた。ここで留意すべきは、撰集資料とかけ離れた用語が出てきた場合、歌自体の推敲といった次元でなく、外部の要因によって生じた場合があるという点である。前掲で挙げた例をふたたび用いて説明してみよう。

○いくちなつなきかへるらむあしひきのやまほとゝきすこゑは、  
れすて（十卷本）

27 五十人杳夏鳴還濫足弾之山郭公老牟不死手（原撰本系）老手不死手

○かみなつきしくれふるらしさをやまのまさきのかつらいろまさ  
りゆく

93 十月霖降良芝山里之並樹之黄葉色増往

本集の本文「老いも死なずて」も「山里の並樹の黄葉」も和歌の表現としては珍しい。ところが、おのおのを十卷本の本文に差し替えてみると、配列の上で脈絡のなかった部分が、他の部分と同様、連鎖式で繋がるのが認められるのである。連鎖式配列で首尾一貫した「第一次編集本」では、この二首は、かならずや、十卷本に近い本文が採られていたはずである。

このように考えるとき、27の場合、「菖蒲草」の素材をただ一つ持つ31の補強を目的として、「第二次編集」時に出典未詳歌28が補入された際、編者の意識によって不老不死の主題が与えられ、下図のような手順で本文が変更された（○印が変更の部分）という線が浮び上がる。また、27の漢詩には、不老不死にまつわる表現が見られないことから、変更される前の和歌本文に即して作られたことが知られ、この推定を保証している。

27 いくつ夏鳴き還るらむあしひきの山郭公老いも死なずて（31と同じ趣向にする）

28 麴賢侯つ野辺の側の菖蒲草香を飽かずとや鶴が音する（菖蒲草の素材を補う）

31 菖蒲草いくつの五月逢ひぬらむ来る年ごとに稚く見ゆれば

93 については、「山里の並樹の黄葉」が古風を存しているとする見方（澤潟久孝「菅家万葉集の和歌の用字に就いて」菅公頌徳録、昭19）がある。けれども、

孟冬細雨足如絲 寒氣初來梁葉時

一一 流看山野裏 樹紅草綠乱參差

とある漢詩によると、和歌を訳したのは起句・承句と見られ、「並樹」に関する表現は見られない。したがってこれは、漢詩作者が空想によって作った転句「一一流看山野裏」（山野をずと見わたす意か）の文字面にひかれて「山里の並樹」の表現が生れたと見るべきではなかるうか。

今見た二つの例からは、形成の初期における和歌本文が現行のそれと異なっていたことが、漢詩を参照することで知られた。小島憲之（『古今集以前』ほか）の言うように、三十一字の歌は、一般に詩の二句ではぼその意味を表現してしまう。したがって、和歌の内容が漢詩のどこに表現されているかを追求すれば、B類の小異歌の中に、漢詩ができた後に変更されたものを見出すことができる。

101の場合を考えてみよう。二系統の和歌本文が共通する部分、



は、

顔色憔悴 形容枯槁。〔楚辭〕漁父)

などを意識しているのであろう。

「敗心田」は「心も朽ちはててしまった」の意で、「心田」の「田」が「枯槁」の本義と関係する。「心田」は仏教語である。白詩にも、

性海澄淨平少浪 心田灑掃淨無塵

〔白香山後集〕卷十七、狂吟七言十四韻)

のごとく、仏教語としての措辞が見られる。小島憲之(前掲論文)はこの用例を示し、『経国集』などにも例があることを指摘する。たしかに、『経国集』には次のような「心田」の用例がある。

植真松於情岳 挺幽蘭於心田

〔経国集〕卷一、和石上卿小山賦、賀陽豊年)

これは石上宅嗣の「小山賦」に和したものである。引用部分は、芸亭のある阿闍寺の景観を叙述したところで、これまた仏教語としての措辞になっている。

しかし、「容顔枯槁敗心田」に、右に見た仏教色はない。むしろ、次に挙げた道真詩に見られる「情田」の用法に近い。

A 家業年租本課詩 情田欲倦秀言滋

〔菅家文章〕卷二、元慶七年(八八三)

これは、「わが家は父祖の代より、年々の租税のように詩を賦することを課せられてきた。だが、世の人の心は今まさに倦み荒もうとして、秀が水田にはびこるように誹謗や中傷がほしのままに行われている」の意。以下、「すでに才能ありと世間に認められている者は、新進の者を誹謗することによってこれから伸びようとする芽を

摘みとってしまい、能力を発揮できないようにしている。(誹謗された自分はそのために)客と逢って話をするのがあっても、しきりに客から白眼でけむたがられ、すんでのところまで出家するまでに追いつめられていた」という内容が続く。元慶六年の夏、大納言藤原冬緒を誹る匿名の詩が伝えられ、その詩の巧みさによって道真が嫌疑をかけられた事件を背景に置く詩である。

「情田」の語に仏教色はない。また、「秀」は稲に似た水田に生える雑草で、この語が「情田」の「田」と関係する。これとまったく同様の縁語的な関係が、「枯槁」と「心田」との間にも見られる点は、特に注目し値する。このことは、(い)の詩が、発想用語の面で、道真詩と並ならぬ関わりを持っていることを示していよう。

そこで道真詩に目を向けてみると、「心田」のみならず、(い)の詩全体が道真詩に密着していることが認められる。

「潜然」について、小島(前掲論文)は、白詩に、

甘棠無一樹 那得涙潜然 〔白香山後集〕卷五、别州民)

と見える一方、六朝・唐の詩にも例が少くなく、白詩語とは断定できないと慎重に述べる。この語は、次のように道真詩にも見える。

B 詩本取諸搗管絃 豊凶今日别潜然

〔菅家文章〕卷二、元慶六年(八八二)

次に「夜半」について、小島は「日中……夜半」の呼応が、白詩に、

日中為樂飲 夜半不能休

〔白香山詩集〕卷三、秦中吟十首、歌舞)

とあることをもって、「心田」「潜然」と合せて白詩語を採用したものと見なしている。誦われるべき結論だが、ここでは、同じ「夜

半」の語が、道真詩に、

C 夜半誰欺顔。上玉。句餘自斷契中金

〔菅家文章〕卷二、訓表大使留別之件、元慶七年（八八三）という形で出てくる点に注目したい。この詩は、渤海大使との別離の宴で詠まれたもので、恋を詠んだの詩とは内容を異にするものの、夜更けになって涙（顔上の玉）を流すという点では共通している。

道真詩には、夜涙を流す表現がほかにもある。

D 惜別何為遥入夜。縁嫌<sup>ミ</sup>落涙<sup>ミ</sup>被<sup>ミ</sup>人聽<sup>ミ</sup>

（同卷二、夏夜於鴻臚館、餞北客帰郷。元慶七年）

E 人散閑居悲易<sup>ミ</sup>触。夜深<sup>ミ</sup>独臥<sup>ミ</sup>淚難<sup>ミ</sup>勝。

（同卷三、行春詞、仁和三年（八八七））

Dは別離の詩の一部で、Cに近い。Eは、たんに夜の涙ということだけでなく、「夜深独臥……」の状況設定において、閨情詩ないしの詩と重なり合っている。

Eは道真の讃岐国司時代（仁和二年八八六）寛平二年八八九〇）の作である。道真は、仁和二年正月、それまでの式部少輔兼文章博士加賀權守の職を解かれ、讃岐守に転出を命ぜられた。妻子を残してひとり讃岐に下った道真は、望郷の念と孤独感にさいなまれ、「心情冷<sup>ミ</sup>」まじき詩を多数残した（『菅家文章』卷三〜四）。Eは、そういう作品群の中に存在する。

閨情詩では、辺境の戦地へ赴いたまま帰ってこない夫に対する、独り寝の女性の侘びしさを表現する。閨情詩に描かれる夫の立場に立たされた道真は、任地での生活から独り寝を続ける妻の立場をも同時に実感して、Eの表現をなしたものと考えられる。

讃岐に下った年の冬、道真は「客舎冬夜」と題した、

F 客舎秋徂<sup>ミ</sup>到<sup>ミ</sup>此冬<sup>ミ</sup>。空床<sup>ミ</sup>夜夜損<sup>ミ</sup>顔容<sup>ミ</sup>。

の句で始まる律詩を作っている。この第二句には、すでにEと同様の閨情詩的な雰囲気漂っている。道真は、自分の境涯を、閨情詩に描かれる女性のそれにひきつけて嗟嘆し、幾度となく自作の詩にとりこみながら形象化していったらしい。

そこで、Fの詩と道真詩AとFとを対比してみると、ABCのように用語や用法が一致するばかりでなく、EはFの結句と、Fは起句・承句とそれぞれ発想を等しくしている。しかも、発想が等しいEFにおいては、夜と涙を除いてまったく同じ用語は見られない。本集上巻の多くの漢詩において、用語が一致しても、発想の面で道真の詩に及ばないことは、すでに金子彦二郎や木越隆が説いてきたとおりだが、この詩は違う。表現を生み出す発想そのものが数首の道真詩に一致しているわけである。よって、少くともFの詩については、道真の作と認められないとされる上巻の詩とは、趣きを異にしていると言ってよい。これに押韻の面での破綻がないことを加えれば、Fの作者は道真と見て、まず誤りはないと思われる。

なお、讃岐在住が終わりに近づいた頃、同じ境涯に置かれている藤六司馬（讃岐掾藤原某）とやりとりした詩の中にも、次のような閨情詩的な表現が看取される。

G 知君独臥夜衣寒（卷四、冬夜有感、簡藤司馬）

H 閨中夜夜見無<sup>ミ</sup>人（卷四、訓藤六司馬幽閑之作、次本韻）

道真が閨情詩の世界を描いたEとHが、いずれも讃岐国司時代に作られている点には注意を要する。このような体験がなかったならば、道真に閨情詩的な表現が実感を伴ってもたらされることはな

ったと思われるからである。

道真の帰京は寛平二年（八九〇）春。知られるように、翌寛平三年に、宇多天皇のもとで、道真は式部少輔・藏人頭・左中弁の職を次々と任せられる。以後の躍進ぶりはめざましく、兼左京大夫を経て、寛平五年二月十六日参議に列し、式部大夫を兼ね、同二十一日左中弁に転じ、三月十五日勘解由長官、四月一日には春宮亮を兼ねている。

帰京以来およそ三年を経過した、寛平五年九月二十五日の日付を本集上巻の序文は附している。この時までには(イ)の詩が作られたとして、帰京後それほど時間は経っていない。

(イ)の詩に基づいた(イ)の歌は、閨情詩の内容をそのまま和歌に移したといつてよく、常識的で平凡である。道真が「寛平御時后宮歌合」にどのように関わっていたか、現在のところ定かではない。だが、道真が(イ)の歌を目にしたことはほぼ間違いない、この時、讃岐における苦しい体験とともに、彼の地で作った数々の詩句を想起したに違いない。このような次第で、当時順境にあった道真は、往時の苦境を懐古しつつ、(イ)の詩を作ったものと思われる。

#### 四、変改の意味するもの

道真が目にしたのは、原撰本系(イ)のごとき和歌であった。ところが、現行の流布本系(ロ)では、別の本文に変改されている。

(ロ)の和歌を単独に読むと、あらゆる閨情詩における基本的設定と何ら変るところがない。また、「独り寝る」という表現は、本集中、「寛平御時后宮歌合」を資料とする歌の中にも、

80 小竹の葉に置く箱よりも独り寝る吾が衣こそ冷えまさりけれ

175 秋の野に駐ける露とは独り寝る我が涙とぞ思ほえぬべき

210 吹く風は往くも知らねど冬来れば独り寝る夜の身にぞしみけるのごとく見られ、当時よく行われたことがわかる。

のみならず、本集恋の部の多くの漢詩は、閨情詩の手法をとりこんでいる。漢詩の中には後補されたものがあることを考慮しても、閨情詩的表現が至る所に見られるのは、当時の恋歌に対する常識的な理解がそこにあったことを示してよう。してみると、この変改はいささか陳腐なものに思われてくる。いったい、何故このようなことが行われたのであろうか。

そこで考えられるのは、前稿で論じた「第一次編集本」の製作過程における、涙の歌を除外する際に変改された可能性である。(イ)の歌では涙を詠んでいるけれども、(ロ)のように変改すれば、涙を詠んだことにはならないからである。このように考えると、(イ)が遺されていることが不審である。

ところが、実際には、歌合を資料とする範囲において、(イ)のほか二首、涙の語を持つ歌が入集されている。

113 つれなきを今は恋ひじと念へども心弱くも落つる涙か

114 人識れず下に流るる涙河堰き駐めてむ景や見ゆると

右の二首には、「今は恋ひじと念」うとか、「人識れず下に」のみ

涙を流すとか、恋愛進行過程のどのあたりかを示す表現が含まれているのに対し、除外された涙の歌には、そのような表現は含まれていない。おそらく、漢学ばかりに励んできた男性享受者を意識して、歌合歌から涙の歌を除外する方針を立てたのであろう。ところが、上巻の資料となった左歌約二〇首のうち、涙の歌は七首を占めていた。七首も除外しては、他の部立と著しく均衡を欠いてしまう

ので、物語的進行の編集方針に合致する右の二首が、とりあえず収められたのであろう。

それにしても、(イ)の歌は、恋愛進行過程のいずこを述べたものかが明確であるとは言い難い。現にこれと同様の歌合歌、

ひとりぬるわかたまくらをひるはほしよるはぬらしていくよへ  
ぬらむ

は除外されている。ならば、何故に(イ)の歌だけが、しかも原撰本系だけに遺されたのであろうか。

まず、除外されなかったことについて言えば、少くとも(イ)の歌においては、その時すでに漢詩(イ)が附されていた、という事情によると考えられる。「第一次編集」の段階ですでに道真の詩が附されていたとすれば、たとえ編集の方針に合わないものであっても、ただちに除外することはできなかったはずである。この時の編者が男性享受者を意識して涙の歌を除外したと軌を一にして漢詩をも重視していたであろうことは想像に難くない。

そこで、(イ)の詩の闊情詩的表現を参考にしながら、編者は方針に合致しない「夜こそ涙絶えず流るれ」の部分を見せ消ちにして、「夜ぞ佗びしき独り寝る身は」と書き加えたのではないか。(ロ)の和歌本文は、このようにして形成されたと考えられる。そして、この書入れと同時に「第一次編集」が行われたことが推定され、(ロ)の本文に基づいて連鎖式配列が行われた。前稿で復原したこの部分の配列は、次のごとくであった。

恋ひ佗びてうち寝る中に往き通ふ夢のただ徑はうつつならなむ  
思ひつつ昼はかくてもなぐさめつ夜ぞ佗びしき独り寝る身は  
鹿島なる筑波の山のつくづくと吾が身一つに恋を積みつる

現行形態の矛盾から、本集に数段階の形成過程を想定した結果、帰納される「第一次編集本」のあり方から考える場合、(イ)の本文では、涙の歌を除外する方針に適合せず、また、種々検討を加えてみても連鎖式配列に復原できないことなどから成り立ち難いと言える。(イ)の本文が遺されたのは、「第一次編集本」が形成された後に、原撰本系祖本の筆者が書写する際、見せ消ちと書き入れとを見落したか、編集の意図を拘みきれずに歌合の本文に即すべしと考えて書き入れを無視したかのいずれかによって生じた、と見るのが妥当であらう。

ここで目をひくのは、道真の(イ)の詩が作られた時点よりも後に、「第一次編集」に伴う(イ)から(ロ)への変改が行われたらしいことである。

道真は(イ)の歌に基づいて(ロ)の詩を作った。作詩の場において、多くの歌の中から(イ)の歌を選び出した背景に、道真個人の体験を踏まえた思い入れがあったであらうこと、述べてきたとおりである。しかるに、創作の場を離れた編集段階の方針によるとはいえ、かつてみずから選んだ歌の一部を変改する営みを、道真自身が行ったとは考えにくい。道真と異なる後人の手で変改が行われたと見るのが自然であらう。

このとき、(ロ)の本文が「佗杵」となっていることが想い起される。これはワビシキと訓むべきもの。言うまでもなく、シク活用形容詞の連体形である。ところが、流布本系の上巻において、他のシク活用連体形の活用語尾には、すべて「敷」を宛てている。これは、ク活用の活用語尾に宛てる「杵」を誤って用いたものと思われる。後人による変改はますます明らかであらう。

したがって、道真がいの詩を作ったのは、『第一次編集本』以前となる。ということは、道真は、「寛平御時后宮歌合」左歌を連鎖式で配列する前の、原初的な本文の「数首之左」に詩を附したと考えられ、これは、上巻の序文の内容と符合している。そして、前稿で想定した『第一次編集本』が、序文の書かれた寛平五年以降の所産であることを物語っている。

以上、本集上巻恋の部にある、一組の和歌と漢詩を読んだ結果において、本集に道真が関わりを持っていたことを見通すことができる。しかし、それは、現在見る本集の形態とはほど遠い、最も初期の段階のことであった。したがって、本集に関わった人間としては、複数を挙げなければならない。

このような見方をしていくと、撰者（编者）・表記者・漢詩作者が、それぞれの段階で、どの程度まで重なり合っているのか、といったことが問題になる。そのためには、後代の编者、上下巻および二系統間の表記者の問題、集中における道真作の詩と他の模倣作の識別といった諸問題を、一つ一つ解決しなければならぬ。

これらの問題は、いずれ他日を期すことにしたい。

(1) 諸本の異同は、浅見徹・木下正俊『新撰万葉集校本篇』を参考にす。以下同様。なお、和歌の引用は、歌合歌と対比する場合は真名表記のまま、それ以外では漢字仮名交りとする。

(2) 「潜然」は小島憲之の意改に従った。諸本「潜然」に作る。

(3) 十巻本歌合の引用は、萩谷朴『平安朝歌合大成』に拠りつつ、原文のひらかな表記に復す。以下同様。なお、十巻本は十一世紀頃の書写と推定されている（小松茂美『かな』）。

(4) 山田論文では、古今集の平安時代の写本の中に、「敢無国」（筋切切）

・「従木間哉来月の景」（同186）・「従今者廻て谷にみし」（同242）等々、一部に正訓字や借訓仮名をおりませた例を指摘し、「新撰万葉集などとも共通する点がある」と言う。

(5) 「損顔容」は「容顔枯槁敗心田」と同じ発想である。「顔容」と語順が転倒しているのは、容・鐘・松・逢と踏む韻律（上平声二冬韻）の関係による。なお白詩にも、「惨淡老容顔、零落秋怀抱」（『白香山詩集』卷十、南湖晚秋）とある。

(6) 押韻の誤りについて、木越論文によれば「新撰万葉集の詩一一九首の中四一首にわたり三六パーセントおかしている」とある。なお、平仄について見ると、(イ)の詩では起句と転句で合計二か所にわたって平をおかしている。だが、ここでとりあげた道真詩のうちでも、ABEに合計四か所にわたって孤平ないし孤仄をおかしているので、平仄については問題にはならない。

(7) なお、上巻秋53において、流布本系では「惜敷」、原撰本系では「惜<sup>+</sup>粹」と表記されている。これは、原撰本系表記者の誤解であろう。流布本系においては、101以外では厳密に表記規則が守られている。

付記 稿を成すにあたって、伊藤博先生から御指導を賜った。記して感謝申し上げます。

（筑波大学大学院博士課程日本文学）